

日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

United Christian Ashrams of Japan

夏季号

▼連盟は創始者の祈りによつて、各地に生れたファミリーの全国的な交わりであり、常に新しい家族の参りを行つて行っている。

開 心
静 聴
充 満
献 身
奉 仕

イエスの復活と歴史

中 路 嶋 雄

聖句 「キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる」
(ルカ福音書二四ノ四六)

どの国の歴史も果しのない悲哀をそそるものばかりである。源平盛衰記をよむのはたえがたい。世界の歴史も個人の一歩も同様である。アレキサンダー大王は紀元前三五六年に生れ三二三年にして世を去った。ヒトラーは一八八九年に生れ、一九四五年に死んだ。僅か三三歳と五六歳の一生であった。二人の間に二二四五年の時が流れ、地球は二二四五廻転した。大王の世界征覇も、ヒトラーの第二次世界大戦も歴史を変えた。日本もその中に加担、アジアにすごいことをしてしまつた。それは結局、残酷と悲惨に満ちていて顔を覆わせる。胸はさけそうになる。アジアの諸国を黙々と懺悔しつつ、お詫びの旅を続けたが詮なきこと。各地に胸をえぐられ乍ら悔恨の涙にくれた。二二四五年間、人の歴史は、憎しみと争いとで埋められた。

マルクスでさえ、『アリストテレスとヘーゲルは観念論者であるが、唯物論者に勝る私達の味方である』という意味を語つたが、その傑出した人に師事した大王。丹念に歴史を学んだヒトラーだつた。それがどうして均しく大征覇を企て

たろうか。偉大な人も弱小な人も、皆やつつけようとする心の持主らしいのである。それに徹底した歴史だ。

釈迦、ソクラテス、老子、孔子、聖徳太子、中江藤樹、二宮尊徳、こんな人々を乗せて地球は何転廻かして行つた。私は歴史に悲願をかけながら、悲観論者にならざるを得ぬ。

聖書は「義人はいない。ひとりもいない。善を行う者はいない。ひとりもない。彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には、破壊と悲惨とがある。」と言いつつ、「神の栄光を受けられぬ者になり切つていよう」と告げる。パウロ自身も告白して「わたしは、何というみじめな人間なのであろう。誰がこの死のからだから、わたしを救つてくれるだろうか」と歎く。人間と歴史は絶望的ではないか。神の審判と断罪を待つばかりの運命なのだ。

愛の化身、絶対者、全知全能の神である主イエス、世を救うために相対者となり、無限は有限に、永遠者は束の間となり、神を極悪罪人として処刑、あらゆる侮辱を加えたのが人であつた。審かれ、断罪され、処刑さるべき人間共が、聖なる絶対者を罰したのである。全能の審判者を罪するとは何んたることか。

罪なき主イエスは、一度は世に罪せられ、人から罪せられたのであつた。従順に無抵抗で一言の反抗も不平もなく、静かに侮蔑を受容された。主イエスは罪の権化の人間と世を救わんと願ひに貫かれた存在であられた。『父よ、彼らに罪を着せないで、お教し下さい』と執成をした主イエスは、遂に、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」との叫びで息を引きとられた。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになつたのですか」と、滅び行く人間、罪深い罰される人間を御覧になつて、主はたまりかね、こう叫ばれたのである。人間と歴史との審判はご自分の審判であり、人間と歴史の滅亡はご自身の滅亡であると感じていられる。主イエスの十字架は人の罪を全く明白にし、一言半句も言えなくした。このような主の大愛に、恐懼、気絶しそつである。罪なしと思つた自分も、主の十字架の前に立つと始めて罪感がこみあげてくる。

若し主イエスが復活しなかつたら、主は極悪罪人として歴史はすんだらう。だが主は復活された。人人は驚き恐れた。主イエスの真実と命は明かになつた。復活によつて、神が神となられたのである。歴史は罪と偽りのものであり、神が神であり給うことが明かになつた。今、世界は審かれています。『神こそ真実にいます』と十字架と復活は語る。主の受胎、降誕、愛の一生、十字架、一切は、復活がないと空しく葬られたであろう。復活の主が歴史を審く。神が神として。

発行所 東京原古江
編集者 海老高
定価

聖霊と異言の賜物(二)

スタンレー・ジョーンズ

以上のことがある一つの目的のために行われた特種の奇跡として、他と区別されるペンテコステ型の異言である。新約聖書の中で他に『異言』を取上げるのはコリントだけである。ここには今一つの型の異言が現われている。即ち誰かが通訳しない限り、話手にも聞き手にも判らない言葉である。

従ってこれは人間と神との間に、今一人別の仲保者を紹介し、この未知の異言を通訳することを依頼することになる。聖書はイエスこそ一人の仲保者であるという。しかしこれは別のものを置く。通訳者が自分の考えを紹介して、これが神の声だと言っても、どうして判るだろうか。これはあなたの導きを不明の憐れみに委ねることだ。ヘブライ語を学ぶ数名の神学生が、異言の集会に行つて、ヘブライ語で詩篇二三篇を読んだ。所が一人の通訳者が立上つて、通訳をしたが、それは全然この詩篇とは関係のないことであつた。

今日見られる異言はコリント型の判らない言葉である。ペンテコステ型では、『皆の者が生れ故郷の国語で、神の大きな働きを聞いた』のである。このコリントに現われ現代にも現われている不明の型も霊の賜物の一つであるが、霊の各種

の賜と、聖霊の賜とを混同してはならない。聖霊の賜はすべての人のためであるが、霊の各種の賜は、聖霊が『思いのままに各自に分け与える』のである。パウロは『みんなが医し賜を持つているのか、みんなが異言で語るのか。みんなが通訳するののか』と問う。つまりそうではないが、しかも彼らは聖霊の賜を持つている。この異言の賜は低い賜の一つであるから、解く者がいない時は用いるべきでないという。

パウロはコリント型の異言は、伝道の働きとして用いられなかったという。『もし未信者が入つてきて、異言を語っているのを聞いたら、彼はあなたがたを氣遣いだと思つたらう』。しかしペンテコステにおける異言は、伝道の働きをし非常に効果的な働きをした。

パウロは更に続いて『しかしあなたがたは更に大なる賜を得ようと熱心に求めなさい。そこで、私は最もすぐれた道をあなたがたに示そう』という。それは愛の道である。第十三章の愛についての議論を十四章一節で結ぶ。即ち『愛を目的とし、霊の賜物、ことに予言することを中心にして、熱心に求めなさい』と。ここで強調されている二つの賜とは、愛の賜と予言する能力であり、これは良い音信を告げ知らせる力である。

所で第一コリント書の十二章から十四章にある異言の議論は、パウロ、ヨハネ、ペテロの手紙の全体とその他全ての手紙の中で異言についての唯一の記事である。この三章にだけ取上げられているの

は、それが分裂と混乱の原因になるからである。もしそれが今日ある一部で考えるように重要であるなら、なぜ一回に限らずもつと度々述べられなかったのか。彼らは『愛、喜び、平和』などを何回もくり返し述べているが、異言の賜は一回きりである。つまり初代教会において異言の賜は重要な働きではなかった。それは静かに背後に廻され、ちがった性格が強く正しく働くようになったのである。

マルコ伝十六章十七節以下の文章の中で、主イエスが異言について述べておられるという答が与えられるだろうか。最近の全ての聖書は、マルコ福音書が十六章八節以下は破損して失われ、二世紀にこの部分を補足しようとの試みが行なされたことを示している。前記の用語はその補足の部分にある。それは聖霊の助けを受けない人が挿入したような言葉である。それらのしるしの全てが半ば魔法的で、一つとして道徳的なものがない。もしこれらの事がキリスト信者のしるしであるなら、キリスト教は魔法のように亡んでしまったことであろう。このしるしの中の二つは主イエスにも見出されるもので、彼は悪霊を追放し、病人に手をおかれた。他の三つ、異言を語り、蛇をつかみ、毒を飲むことは、彼にはなかった。イエスに当てはまるものが二つだけで、他の三つは当てはまらない、このようになりすと一体どんなものであるうか。

アシュラムの五大原則

(一) 御言への静聴と立証

海老沢 宣道

アシュラムは祈禱生活の徹底を期するもので、いわば「祈りの道場」である。祈りは神との交わり、主イエスとの交わりであり、会話である。だから今まで多くの者がしていたように、一方的に自分の願いをいかに熱心に祈つても祈りっぱなしで、神のお答を聞かないのでは会話にならない。われらの願いと神のみ言を聴くことの一致によって初めて祈りは成立する。そこでアシュラムには静聴の時を守られる。但しこれは昔あるグループ運動でも使用したが、その意味内容は少々異なる。彼らは聖書よりも自己の願想を先にした。然しこれは何よりも聖書を通して語りかけられる神のみ言の前に、自らを明渡し、サムエルが祈つたように、「しもべは聞きませす。主よ、お話し下さい」と、まず主の御言を頂き、不信と不義とを悔いて、新しい決断を与えられ、御言に応答するのである。このことは期間中の夜を通したの連鎖祈禱の時に、昼間にある「祈りの細胞」(一組十人程度)という交わりにおいても守られる。(註、地区によってはファミリーとか分団とも称している)。

御言を静聴するのであるから、聖書講演とか釈義とかで神学者や牧師を煩わす必要がない。従来の夏期修養会、聖会、研修会、信徒協議会などには必ず特別講

アシュラムの五大原則

(一) キリストへの明渡し

(二) 御言への静聴と立証

恵みの座に來れ

松山番町教会員
熊美枝子

昨年九月、私は深い祈りの中に待ち望んだ第八回四国アシュラムに出席する事が出来た。初めから終りまで、感謝感謝の連続、同信の友と共に、心砕かれて主の前にひざまづき、深く祈り、深く聖言を聴き、互いにぎんげし合い、受けた恵みを分かち合う事のすばらしさに、恵みの座であり、来りて見よと、呼びかけた。

ハンター師の、「恵みと感謝は、右足と左足のようなもので、クリスチャンとは、その生活が、喜びに躍っている者である。」との言葉は、今も強く心に残っている。

一同大いに祝福された充滿の時を持つ事が出来たが、特に、ある日、突如として、全盲の不幸におそわれた若い高校教師松田兄のお証しには、みんな泣かされた。「イエス様のお話の聞ける所だったから、私は何処へでも行きたい」と涙と共に叫ばれたお声が、私の胸に、鋭くひびいてくる。

全く希望を失くした人の心をも、温く包み、癒し、慰め、励まし、力を与えられる愛なる主のご臨在を覚えて、心からなる賛美を神に捧げた。そうして、溢るる感謝は、拙い詩となって、ノートに流れた。

み手の星

くだかれた心
聖められた心
お任せした心
キリストの香りが満ち溢れた心

おお、それは

山より川より

高く深く

花より鳥より

美しく愛らしく

澄んで輝くみ手の星

神、創り給う尊き宝

歌を忘れた

カナリヤ

函館教会員
増井芳雄

昨秋の道南アシュラムで、ハンター師が『イエスはわれらの主であるばかりではなく、教会の主である』と強調されたことに、私は、大きな感銘を受けた。われわれは、イエスを独占してはならない。イエスは教会の主であり、日本の主であり、世界の主である。『イエスは主である』という標語は世界のキリスト者全体の標語でなければならぬ。ところが教界の一部に、イエスは主であること否定する『史的イエス』派があり、アシュラム運動に反対する教会もあるのはどうしたことであろう。

今は、教会革新の時である。祈禱生活を忘れた信仰生活は決して福音の実を結ばない。歌を忘れたカメリア同然、役に立たない。日本のキリスト者は神の国の福音に無関心である。イエスの『種まき』の譬(マルコ四・二八)のように、「土の薄い石地に落ちた」種であるかもしれない。日本の精神的土壌は荒地である。しかし、キリスト教が、日本の人々に強い印象を与えることができなくなったのは、人々がキリスト教に反対しているからではなく、無関心になったからである。祈禱と讚美、宣教と愛の実践を忘れたキリスト者は、歌を忘れたカナリヤである。

人間と会場と講師

○アシュラムは参加者の多少より、霊交の深められることを問題にする。スタンレーは最初のアシュラムを英国婦人とインド人の三人だけで初めた。

○復活の主との出合いは、聖地とか特定の地区に限らず、最寄りのアシュラムにおいて十分にできる。これが主の辺在性を信じる者の態度である。

○講師や奉仕者の顔ぶれを見て、参加をきめるのは、イエスを主と信じていない人間の態度である。

○アシュラムの霊交を楽しみただけではない。変貌の山に留まらんとするペテロに「起きよ」と主は言われて、山を下り、救のみわざを続行された。

(三) 聖書の啓蒙と実践
(四) 神の国の体験と献身
(五) 教会への奉仕と伝道

師の主題講演とか、研究発表があった。しかしアシュラムは誰かの話に感激して恵まれたとか、お互いの協議でよい決議文ができたとか喜ぶものではない。特定の牧師を指導者としなくて、唯一の主イエスを中心に集まり、御声に聴従する。

従って細胞においても全体集会においても、特定個人の知識や経験から、他人を教える態度は取らず、お互いに示された御言を分かち合い、共に兄弟姉妹の必要を聞き祈りの助け合いをする。密室において個人のアシュラムを守る時は毎日の祈りの題目とそれに示された御言をノートしておくのがよい。二人三人の細胞においては紙片にそれを書いて互に交換して祈って貰うのである。この静聴の経験を身につけて帰ると、家庭も教会も変ってくるにちがいない。

アシュラムにおいても証しの時が持たれる。復活の主は御弟子たちに『聖霊がくだる時、あなたがたは力を受けて、わたしの証人となる』と言われた。ペテロを初め使徒たちはその通り復活の証人として立った。然し今日の諸集会での立証者は自分の信仰の方に重点が置かれ、主のみわざが影薄くなっている嫌いがあふ。アシュラムの証しは、主の聖前に静聴し、御言によって『主があなたにどんなに大きな事をして下さったか、語り聞かせなさい』と言われたことを実行するのである。故に長い経験のある信徒ばかりでなく、初信者も一人残らず、そのアシュラムで受けた恵みを証しすることができる。こうして養われた信徒は教会の宝である。

今秋も祈りのうちに 各地でアシュラム開催

友人を誘って参加しよう

今夏も各教会や教区で修養会や講習会が開かれ、参加されることでしようが、霊の深みまで新しくされるために、ぜひ各地区で今秋開かれるアシュラムに今から祈りの備えをもって御参加下さい。左に各地の日程、会場、協力者、連絡先を列記します。

第五回道南アシュラム

十月二六日―二八日 函館千歳教会
協力者・谷本清、広島流川教会牧師
連絡先・白川鄭二・函館市松陰町九

第四回東北アシュラム

十月十一日―十三日、山形尊王蔵王荘
協力者・高瀬恒徳、聖テモテ教会牧師
連絡先、村上東、郡山市清水台二一六

第十三回関東アシュラム

十月八日―十日、青梅古里福音の家
協力者・関東地区委員一同
連絡先・横山義孝、西川口教会内
川口市西青木一―二五―二一

第八回中部アシュラム

九月二日(月)三日(火)一表教会
協力者・高瀬恒徳、高瀬和子
連絡先・内村サムエル、安田教会内
名古屋市昭和区安田通二―17

第九回関西アシュラム

十一月四、五日、千里山シオンロッヂ

第十三回中国アシュラム

十一月三日―五日、カトリック修道院
協力者・高瀬恒徳(前出)
連絡先・谷本清、広島市上鞆町九―13

第九回四国アシュラム

九月二―二三日、徳島鳴島兄弟教会
協力者・山根可弼、東京池上教会牧師
連絡先・宇都宮充、松山済美会館内
松山市二番町三―一〇―七

第九回九州アシュラム

十一月二―二三日、福岡早良千石荘
協力者・榎本保郎、今治教会牧師
連絡先・山本繁夫、門司大里教会内
北九州市門司区藤松一―二一

以上何れの地においても主の御臨在の下、大いなる聖霊の恩化に浴せられるよう切に祈っています。

第二回世界アシュラム大会

今秋十月インドに開催

一九七二年六月にエルサレムで第一回世界大会を創始者スタンレー・ジョーンズを迎えて開いた北米アシュラム連盟は、今は亡き博士の遺志を継ぎ、二年毎

に世界大会を開くこととなり、第二回を来る十月一日から四日までニューデリー市において開催することに決定。五日は発祥地サト・タルに向い、習日はそこで一日アシュラムを守り、七日ニューデリーに帰ることになっている。その間、朝の聖書の時、午前に立証と革新のメッセージ、午後には教会活動の時などのプログラムが組まれ、博士の後継者マシューズ監督、カマルソン博士、G・ハンター、メリー・ウエブスターその他国際的ならいダーたちが御用に当ることに内定している。

前回は各国から三二五名参加、日本からは中路、鈴木両理事が出席したが、今秋は更に多数の参加を希望され、過日北米の役員、ペンバートン師が世界を一周され、日本にも来られたので、われらの代表として中路、鈴木、大石の三氏を送りたいと考えている。尚参加希望者のお申出でを大いに歓迎する。

世界アシュラム会場の定礎式

右大会の前に北米からの参加者一同は聖地巡礼をして、ガリラヤ湖畔ペニエルに至る、そこで故ジョーンズ博士記念の世界アシュラム・リトリート・センターの地鎮と定礎の式を守る予定である。

東京で国際ミニ・アシュラム

十月二十日(日)午後開く
第二回世界大会に出席し帰途日本に立寄る数十名の北米人を迎え、十月二十日(日)午後三時から九時まで、淀橋教会

を会場として『国際ミニ・アシュラム』を開催する。日本側も少くとも五十名以上参加されるよう期待する。
開会礼拝、三時、説教、高瀬理事長祈りの細胞、四時(静聴と分ち合い)夕食 六時
立証の時、七時、日米数名
充滿の時、八時半、閉会、九時。
世界アシュラムの霊気を吸収する絶好のチャンスである。多数の方々は今から祈りをもって参加されんことを望む。

創始者ジョーンズ博士記念 三大事業への献金募集中

日本アシュラム兄弟の協力を
故スタンレー兄弟にアシュラムを教えられた世界の友は、生前希望された仕事の中左記三つを記念事業として実行することに決定、予算六〇万ドルを計上した
▼第一、世界アシュラム・センターをガリラヤ湖畔に建設。
▼第二、アシュラム未開国への活動費。
▼第三、発祥地サト・タルのセンター強化とクララ・スエイン病院の増築。
日本連盟もこれに参加、目標を一万ドルとした。

◎送金方法 振替東京五〇二五九(名義、江古田教会)利用、「ジョーンズ博士記念献金」と明記御払込み下さい。
記念事業献金報告(四)

- (一九七四年三月―五月)
▼二万円 大谷賢次夫妻(青梅バプ)
▼一万円 大久保 進(中野バプ)
▼五千円 陳興 進蘭(中津川市)
○第四回計三口・金三五、〇〇〇円
累計 金一一七九、四〇〇円

▼アシュラムとは故スタンレー・ジョーンズ博士がインドの退修方式を取り入れて創始されたキリスト教の新しい祈り生活のことである。

所野区 19-12 会気付 人道 徳 30円 人宣 人恒